

「父から教わった大切なもの」

小松市立板津中学校 3年

浦 家 遼 司 (うらいえ りょうじ)

僕にとって「障害者」とは身近に感じる言葉だと思う。

彼は小学校五年生の時に突然、耳が聞こえにくくなった。その日は保護者の方が観に見える授業参観だった。先生が生徒達に

「〇〇ページを開いて下さい。」

と指示を出したが、彼はその指示が聞こえなかった。授業が終わってから、不審に思った母が彼を病院に連れていった。彼はなぜかも分からないまま病院に連れていかれた。医師に耳の事を説明され、医師の勧めもあって補聴器をつけることになった。

僕はこの話を自分のおばあちゃんから聞いた。この話の中での母というのは話を聞かせてくれたおばあちゃん、彼というのは僕の父の事だ。

僕が生まれてから、父は親としていつもそばにいてくれる存在であって「障害者」としては見てはいなかったし、思ってもいなかった。耳が少し聞こえにくいけど補聴器の手を借りて、生活に支障をきたす事は全くなかったからだ。

父は一昨年に県庁で県知事から障害者として二十年間働き続けたことを称する賞状を頂いた。僕は心の中で、うれしい反面、障害者として見られているのが嫌だった。

「父は障害者として見られているのかな。」

という疑問を持ってしまい、その事を考えるとなぜか人の目が嫌になった。

しかし、違う視点からその疑問をとらえてみるとただ単に自分が障害者という言葉に偏見を持っていただけだった。

障害者は少しの障害を持っているだけで、他は自分達と何も変わらない。

確かに父は耳に少し障害を持っているけど何でも出来るし、人一倍情が厚い。父は未だにソフトボールとバドミントンをしている。

そんな父に僕は色々な事を教えてもらってここまで生きてきた。

大好きな野球をしている事も父のおかげだし、自分で言うのは照れくさいが僕も父に似て情が厚いと思う。

父の背中を見て育ってきた僕は父が耳の事で苦労した事やつらかった事はよく知ってい

る。その知っている事を他の障害を持っている人に目を向け、その人のためになる事を父の事でよく理解している自分がしていかなければいけないと感じている。

この前、高校の体験入学に電車で行ってきた。その帰りの電車で杖をつきながら入ってきたおばあちゃんがいた。僕はすぐに席を譲っておばあちゃんをすわらせてあげた。おばあちゃんは僕に話しかけてきた。色々な話を聞かせてくれた。僕は一緒になって食い入るように話を聞いた。おばあちゃんは自分が降りる駅に気付き降りようとしたが、足が不自由で杖だけではうまく立てなかったから僕がおばあちゃんの腰を持って支えた。ホームへ降りる時はドアが閉まらないように車掌さんに手を上げて合図をおくり、おばあちゃんをホームまで降ろしてあげた。その時おばあちゃんに

「ありがとう、気を付けて帰ってね。」

と言われた。すごくうれしかった。

人に、その人の為になることをして感謝の言葉をもらおうとすごくうれしかった。その人のためになる事をしてよかった。おばあちゃんにとってもうれしかったと思うし、それ以上に自分が自分に対してうれしかった。

自分でも、なぜあの場面ですぐに席を譲って、ホームまで降ろす行動を取れたのか自分でもビックリした。

おばあちゃんに対して思いやりの気持ちを持って行動する事が出来たのは、やっぱり父の事を見てきて、家族としてよく理解しているからこそ、おばあちゃんのために行動する事が出来たと思う。障害者やお年寄り、目の前で困っている人を人として思いやりの心を持ってその人の為に行動する事が社会で生きる人の心として大切なのではないかと思う。たとえ、その行動が失敗してその人の為にならなくてもいいと思う。大事なのは相手に対して思いやりの心で接する事だと思う。

この心は父から教わった大切なものだと思う。一生忘れずに生きていきたい。